

カテーテル検査・治療後の動脈穿刺部確認エコーの実施

佐藤 菜津美¹⁾ 谷津 隆之¹⁾ 井上 拓也¹⁾ 渋谷 直子¹⁾ 諏訪部 桂¹⁾

赤路 和則²⁾ 美原 盤³⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 検査課生理検査室

2) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 脳神経外科

3) 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 脳神経内科

[はじめに] 当院は、脳血管疾患専門病院として年間約 200 件の血管撮影検査、150 件の血管内治療を実施している。これらの検査・治療後、止血が不完全な場合には穿刺部周囲に仮性動脈瘤を形成することがある。当院では検査治療後経時的に状態観察を行っていたが、稀に所定の時間を過ぎて圧迫を解除した後でも仮性動脈瘤を生じたケースがあった。これは、解除後に持続出血があった場合、目視で確認できるまでにタイムラグが生じることが要因と思われた。そのため穿刺部確認エコーによる仮性動脈瘤早期発見のための手順を構築した。

[方法] 検査・治療後の翌日にエコーが実施されるよう医師にオーダーを周知した。クリニカルパスで運用している脳血管撮影検査(1泊入院用)ではパスを改訂、2日目朝一番で動脈穿刺部確認エコーの実施を組み入れ、2021年10月より開始した。

[結果] 2021年10月から2022年7月までの期間、対象となったカテーテル検査・治療を実施した全243例のうち202例で穿刺部確認エコーを実施し、その中で3例(発生率1.5%)に仮性動脈瘤が確認され、いずれもエコー下圧迫で止血を得られ、トロンビン注入や外科的修復などさらなる処置は不要であった。

[考察] カテーテル検査・治療後、穿刺部周囲の著しい腫脹などの外見的变化が見られるまで出血が持続していることに気付かないと、その後の処置への影響も大きい。特に、検査のための1泊入院の場合、検査翌日、午前中に帰宅する患者では穿刺部の止血を確実に確認することが求められる。穿刺部確認エコーの実施は患者の安心・安全の担保に大きく寄与すると思われる。